The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ククリット・プラモート『シー・ペンディン(王朝四代記)』と“クンラサトリー” : タイ近代女子教育の日本との関わりの考察とともに |
| Author(s) | 平松, 秀樹 |
| Citation | 待兼山論叢. 文学篇. 2008, 42, p. 99-118 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/7370 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# ククリット・プラモート『シー・ペンディン（王朝四代記）』と“クンラサトリー”

## ――タイ近代女子教育の日本との関わりの考察とともに――

平　松　秀　樹

タイにおいて女性の社会進出が進んでいるという議論は多い。しかし、実際はそう簡単には割り切れない問題である[1]。社会的外見に相反して、女性の役割を限定する男性言説が社会の通底に根強く流れているのも看過できない。例えば、本稿で扱う著名なククリット・プラモートの小説『シー・ペンディン』（以下「四代記」と略記）は、現在でも大きな影響力をもつ文学作品であるが、そうした男性言説の好例であろう。またその源泉には古典文学の男性詩人スントンプーの有名な「女性訓」的価値観があり、そこに描かれる理想の女性像、すなわち“クンラサトリー”的な女性像を好しとする価値観が、社会の底辺には流れている。「四代記」における主人公プローイもまた、かくなる男性言説により造形されたクンラサトリーの一人である。

さらには、「四代記」の冒頭で母がプローイに語る愛人・妾の問題は、今は昔の話どころでなく、現在でも主流の価値観であり、小説やテレビドラマの主題と何重にも呼応している。たとえば近日タイで人気を博し日本でも若干話題になった『ソンクラーン・ナンファー（天女の戦争）』[2]においても、三角関係四角関係のごたごたの末、結婚するに至ったのはいいが、夫の隠し子が登場する。ちょうどプローイの夫にあったように。しかし「ナンファー」の女主人公は、夫の浮気に耐え切れず離婚し、かつて愛人であったもとの男性のところへもどる。対するにプローイの夫には「隠

し子」はいたものの、浮気は描かれていない。プローイの薫陶が夫を感化して、その面では幸せに一生をおくるのとは大きな違いであろう。プローイのように淑徳に生きれば、浮気をしないいい夫に恵まれ幸せな一生を送れるとのだという、男性作家ククリットの押し付けとも映るのであるが、男性の理想像としてのプローイは、いずれにせよ今でも大いなる人気を博している。また女性ファンも多い。こうしてみると、スントンプーやそれを受け継ぐククリット的価値観は盤石にもみえるが、今後どの方向へむかうのだろうか。

私見では、ここ数年タイ（特にバンコク）では日本のポップ・カルチャーの影響を受け激しい文化変容がなされているが、タイおける女性の変遷は日本における変化との対比も含めて、目が離せない議題となるであろう。昨年度、文学研究科による共同研究にて、タイにおけるジェンダーを考える機会を持ったが、そこで荻野美穂氏をはじめとする研究者たちが提示しているように、タイ社会でのダブルスタンダードな女性の位置を考察することは、日本人の我々にとっても有益であろう[3)]。本稿は、こうした問題意識を前提とし、今後の考察の第一歩となることを目指したものである。

具体的には、本稿ではまず、「四代記」をテキストとしてクンラサトリーたるプローイの女性表象とその背景となっている当時の女子教育の様子を考察する。次にタイ近代の女子教育が明治日本の女子教育と関わりを持っている点に着目した上で、実際の当時の女子教育の様子を考察し、「四代記」にみたプローイの教育と重なる点を探っていきたい。またその過程で、当時の教育を日本の影響を受けた「良妻賢母」主義と指摘する見解への疑問を提示したい。

## 1．プローイ――伝統と近代教育のはざまで

「プローイ、お母さまの言うことをよく覚えておきなさい。将来おまえも子供や夫ができるときがくるでしょうけど、気の多くないひとでなければだめですよ。奥さんをたくさん持っている浮気者を夫にしてはいけませんよ。お母さんのように大変なことになってしまいますからね」「決して誰かのミヤ・ノーイ（妾、愛人）になってしまうことがあってはいけませんよ。」（『シー・ペンディン』1：1[4]）

963 頁にもわたる浩瀚な長編小説『シー・ペンディン』（初出「サヤームラット」紙 1952-53）の冒頭を飾るのは、これからラーマ 5 世の後宮へと宮仕えに出立しようとする主人公を心配する母のセリフである。「四代記」は次節で触れる「チャクリー改革」の近代化の荒波の中でのプローイの一生が、実際にあったさまざまな出来事の詳細とともに描かれており、当時のタイ社会をよく映していると定評のある作品であり、1892-1946 年の間、即ちプローイ 10-64 歳までの様子が描かれている。この母の言葉はまた当時のタイ社会の男女関係をも暗示している。名門貴族出の父を持つプローイは宮中にてさまざまな技芸を学ぶのであるが、彼女がまず学んだのは、朝は「ムンラボット・バンパキット」という名の教科書であり、午後は、檳榔子やキンマの葉の整え方や花輪作りであった。日本語版の解説も書いている森は別の稿で、「四代記」を典拠にして 5 世当時の女子の習得すべき教育を「料理、菓子づくり、辛子油づくり、タバコ巻き、キンマ噛みの盆つくり、花輪づくり、庭園の手入れ、などの家事と、日常の礼儀作法のふたつを意味していた」（森 1976：142）と纏めている。それに加えてさらに森はスントンプーという詩人による女性訓などをはじめとする「スパーシット」（森はこれを格言文学としている）が女子教育に果たした

役割を指摘している（同：148）。

数年後、プローイはかくの技芸を習得し、いとしい人（恋人ではなく心秘かに思いを寄せる人）のために、檳榔子やキンマの盆を心をこめて作るのであった。このような伝統的女性の教育は、すべからずよき妻になるための嗜みの一環であった。しかし、プローイはいとしい人と結婚するのではない。彼女は年長者の言うことに従った「見合い」結婚が一番幸せという教えの中に生きる女性でもあるからだ。ここで注目すべき点は、プローイにとって「愛」は結婚の理由にならないことであろう。愛は結婚の理由ではなくて、その結果なのである[5)]。ここで視点をすこしばかり移して韓国の事例をみると、韓亨九は伝統的朝鮮社会の風俗が「一夫一婦多妾」と言われることを挙げた後、その結婚制度について「愛するから結婚する」という近代制度に対する「結婚したから愛する」というアジア的な観念の存在を指摘しているが(韓:1-2)、タイの事例とも奇しくも一致する。プローイは全人格を夫にささげるのが女の幸せであるよう教育されているのであるが、「三従」をよしとする当時の教えは、プローイの仕える王女が花輪作りをしながら彼女に語る次の会話に端的にあらわされている。

> 「愛するとか、愛さないかとかは重要ではないのですよ。一緒に過ごしているうちに自然と愛するようになるものです。大事なのは、おまえの年長者（プーヤイ）が、ふさわしいと思い、おまえの幸せを考えてくれることです。おまえは年長者の言うことに従う義務があるとは思わないのですか。愛で夫を選んだとしたら（…）ある日愛が尽きたら、すべてそれで終わり。もうそれ以上一緒にはいられなくなるのですよ。」（1：289、（…）は引用者による省略をあらわす。以下同様。）

こうした教育をそのままに受けて育つプローイの価値観は古典文学の詩人たち、特に既に挙げたスントンプー（1786-1855）の「女性訓」の軌条

に沿うものであり、さらにククリットは現代版「スントンプーの訓え」とでも思しきものを自社の紙上に展開し（Mattani：113-114）、また読者の身の上相談に対し「女性訓」的アドヴァイスを書いている（Sumalee：124）。スントンプーの女性訓は男の作者・詩人によるアドヴァイスであり、〈夫は吉祥、婦女に偉大な威光を示す〉や〈女の真価は宝石（ケーオ）のような処女性〉などと説いた科白が随所に散りばめられているのだが、男性中心の一夫多妻制の価値観や、女は男の補完物としての規定をあらわすものであった。このようなスントンプー言説は、後述するが、重要な意味をもつ有力な男性言説なのである。

かくのごとき教育を受けてきたプローイは物語中で様々な事態に衝撃を受ける。まずラーマ５世時の西欧への外遊時（1897）に、サオワパー王妃が摂政（Regent）に就任したことに衝撃をうける[6]。またプローイは男女がいっしょに歩いても恥ずかしくない社会の到来に戸惑いを隠せず、国王の外遊帰国祭典で、男子校（ラーチャウィッタヤーライ校）と女子校（スナンターライ校）[7]の生徒がともに、鹿鳴館時代の影響を受けたお茶の水（女高師）さながら、洋服を着用しダンスを踊るのに驚くのである[8]。

さらに時代は下りラーマ８世時、プローイが50代になった第４部においては、西洋風の化粧でさえも奇妙に映る彼女には、ミッションスクールに通う娘の行儀作法があまりに現代的であるのが気に懸かる。ここではラーマ５世が懸念していた材料がにわかに現実になるよう二重写しにされている（詳細は次節参照）。その中でも、娘とプローイとの間に交わされる「女の幸せ論争」とでもいうべき以下の議論は、当時の教育に対しての二つの態度を知る重要な手掛かりとなるであろう。

「お母さんは、昔風の考えばかりをよしとするのね」「昔の人は結婚すると、あとは死ぬまで我慢、夫にミヤ・ノーイ（妾・愛人が）が何人

いようと我慢できた。夫にどんなに踏みにじられようと我慢あるのみ。昔の女性は男の物と思われていた。自分の人生なんてありやしない。」

「母が知っている最高の幸せは、愛する人に何かしてあげる満足の喜びからくるのですよ。その人が満足して幸せを感じるように何かしてあげることができたら、（…）私たちもそれでとてもとても幸せを感じることができるのですよ。」（2：815-16）

勿論プローイはこうした時代の変化に戸惑い、それをうまく受け入れることができない。さらにこうした社会の変遷を象徴するのはプローイの出産をめぐる変化であろう。ユー・ファイという火籠もりをするタイ伝統の出産法（上の息子）から西洋式（娘）へと変化する。さらには、成長した娘の「いまでは（バース）コントロールができるのよ」（2：752）という言葉にプローイは愕然とし全身が冷たくなる。プローイの受けた教育においては、産児制限などという概念は決して出てこないのである。

ところで、ここで２つの重要な点が考えられる

第一点は、作者が、新聞社主でありのち首相も務めた（1975-76）、社会に圧倒的な影響力を誇った男性知識人作家であることである。執筆年代はすでに 1932 年の立憲革命より 20 年を経過した 50 年代であるが、ククリット（1911-95）は、絶対王政の擁護を前提として書いている（サーイチョン：167-206）ので、古き良き価値の温存に主眼があり、プローイを「古き良きサイアムの象徴」として創造していることだ。先ほど挙げた引用においても、作者（ククリット）の主眼が、娘ではなく母、即ちプローイの側の価値観を是とすることにあるのは言うまでもあるまい。さらに看過できないのは、もっとも民主的だったとされるいわゆる「学生革命」の高潮期にはこうした価値観はさすがに批判の対象とはなったものの[9]、それをものともせず、

いきのび現在に至っているという事実であろう。ククリットの思想的保守性は現在でも非常に影響力があり[10]、同じ年代に自立した女性を描こうとしたセーニーの「ワンラヤーの愛」（1952）や「妖魔」（1953）が、「学生革命」時に大いに賞賛されて「バイブル」とまで言われながら、いまではあまり読まれないのとは極めて対照的である。近年はとくにバブル経済の崩壊のあと、タイの伝統文化への再注目がされているという報告もあるが、バブル崩壊後のノスタルジーとしても、ククリットの「伝統文化」は再登場し、姿を変え現在まで第２、３のプローイは生み続けられているのかもしれない。

もうひとつは、第３節と議論が連なっていく点でもあるが、プローイはいかなる意味でも国家のための「賢母」ではないという点である。伝統的な「よき妻」即ちあくまでも旧式の良家の婦人“クンラサトリー”の代表に留まる。夫に尽くすのみ、子を育てるのに意見は夫に従うのみ、子供には必ず孝行を期待するといったプローイ世代は、マッタニーが鋭く指摘しているように、社会意識が希薄でありその関心の射程範囲はよき妻・よき母として、「家族の安寧と商品の値段と日々の家計の心配」（Mattani：95）にとどまり、近代的な意味での「良妻賢母」ではないということである。

以上のような特徴を我々は、みてとることができるわけであるが、ところで、この『シー・ペンディン』に描かれているような当時のタイ（とりわけバンコクの上流社会）の様子に衝撃をうけた日本の教育者がいた。

## ２．タイ近代女子教育の日本との関わり――ラーチニー女学校と安井てつ

中国・朝鮮はさておき、タイが明治日本の女子教育と関わりを持っていることは、日本では一般にはほとんど知られる処とはなっていないであろう。いやタイ本国においてさえ、タイ最初の本格的な女子校であり、現在でも名門校として屹立するロンリアン・ラーチニー（Rachini School）の

初代校長が日本人であったことなど今ではほとんど忘れられている（あるいは当時も知る者はごく僅かであった）。

> 暹羅国三年間の滞在は私に種々なる新しい経験を与へたのである。彼地に於ける貴族の生活、一夫多妻主義の其の子女に及ぼす影響（…）無数の問題が研究材料として私に与えられたのである。之と同時に生徒に接するに従って、愛は国境を超越するものであるとの体験も得たのである。」（青山：107）

後に東京女子大学の学長になるなど当時の高名な女子教育家の一人であった安井てつ（1870-1945）はバンコク時代を上のように回想している。日露戦争の勝利がアジア諸国に深甚な影響を与えたことは周知の事実となっているが、日清戦争後すでに、日本へのアジア各国からの熱い視線が注がれるようになっている。たとえば、小関三平は、小栗風葉の「青春」（1905-06）の主人公小野繁が「堕胎」後の人生の転機を清での女子教育に求める選択をしたことをとり挙げて、実は日清戦争（1900 年）を勝利した時点から、「近隣諸国は、王室あるいは貴族の子女の教育のため、教師の派遣を日本に依頼し始め、やがて留学生を送り込むようになる」事態を指摘しているが（小関：66）、上海の女学堂をへて（1903 年）内モンゴル・カラチンの王室に招かれた河原操子に加え、1905 年にバンコクへ渡った安井てつもまた海外へと赴いた教師のひとりであったのだ。当時の文部大臣菊池大麓に懇請され、こころならずも、女子教育担当のいわゆるお雇い外国人としてのちラーチニーと名付けられる女学校（英語名 Queen's School、日本語呼称「皇后女学校」）のあるシャムへ旅立った。

安井を招聘するにいたった当時のタイ側の社会事情をここで少し説明しておかねばなるまい。明治天皇とほぼ在位期間を同じくするラーマ 5 世王（チュラーロンコーン王、治世 1868-1910、明治元年 -43 年）時代にタイの

近代化が様々な分野で行われたことは、日本でもよく知られている。それは、全体としては、日本と同様に西洋を範（特にイギリスの影響が強い）とした改革であったが、それ以外にも明治日本の近代化はラーマ５世に少なからぬインパクトを与えていた。なかでも日本の教育勅語にみられる天皇制護持の内容に特に関心があったようだ（村田：190）。

５世王は、海外視察後いわゆる「チャクリー改革」を行うが、その中でも教育改革は重要な位置を占め、男子の官僚養成のための近代的な学校設立に着手する。また一方では、最初の女子校とされるスナンターライ校を、不慮の事故（溺死）で亡くなったスナンター王妃に捧げるかたちで 1880 年に設置した、その後、ラーチニー校が 1904 年（明治 37）４月１日に開校したのだが、その間に日本と同じようにミッショナリーがタイ女子教育に果たした役割も無視できず、私立のミッション系女子学校（特にアメリカの長老派教会）の役割も大きかったとされる。こうした動きは、前王のラーマ４世（治世 1851-1868）がミッショナリーの婦人たちに、自らの子弟に英語を教えさせた延長上にあり、王子時代のラーマ５世が習った「アンナと王様」のアンナ・レオノーエンズは日本でも特に有名であろう。

牟田和恵は「維新以来の日本が接した欧米は、ヴィクトリアン・モラルの影響下にあり、まして、お雇い外国人として来日し影響力をもっていた欧米人は、階級的にそのような規範を強く内面化している人々であったろうから、（…）」（牟田：83）と指摘しているが、こうした状況はある程度当時のタイでもパラレルであったと考えられる。現にラーマ４世時代以降、ミッショナリーによりタイ社会批判が行われるようになり、とりわけポリガミーへの攻撃が熾烈を極めていくのである。

ところで日本人最初の国費タイ留学生とされる山口武は、安井が招聘された事情を次のように述べている。当時のタイの女子教育は「主として英国婦人の手で指導されてきたのであった。が（…）『チュラロンコルン』

皇帝は、東洋女性の教育は出来れば東洋女性により躾する方がピッタリ来るとの考を有し居られた」（引用は青山：84 より）。山口武の記述は雑感に過ぎず、ラーマ 5 世自身が、安井を望んだという根拠とするには極めて薄弱であるが、他の資料等も顧みれば、ミッショナリー婦人の手による教育には、アンナの教育に対する苦い思い出もあり、ラーマ 5 世は少なくとも忸怩たる思いを抱いていたのは確かであろう 11)。とりわけ西洋式の行儀作法や考え方にタイの子女が染まっていくのが懸念材料であったようだ。こうした懸念はすでに述べたように「四代記」でも描かれ、娘を案じるプローイの姿とも重なっている。

こうした状況の中、前述のタイ最初の女学校スナンターライ校はすぐに閉校になるなどしていたが、個人的に女子教育の必要を切に感じていたサオワパー王妃は、資金を下賜し、タイにおいて本格的な女子教育のための学校、すなわちラーチニーの設立、を目指すとともに、日本にも女子留学生の派遣を計画したのである。

それと対照的に 5 世王は官僚養成とは関係のない女子教育には、全体として興味を示すことはなかったと多くの論者が指摘している。さらには、ラーチニーを始めとする女子教育に資金を提供する意義を認めず（ユパーポーン：71）、また留学生試験に受かった女子にも留学を認めることはなかった（ケーロン：158）。こうしてみるとラーマ 5 世よりもサオワパー王妃が立役者となってタイの女子教育の輪が回転し始めたといってもいいであろう。即ち、それまでの伝統的な積徳行為であった寺院の建立よりも女学校設立を選んだ王妃（ユパーポーン：43）の決断は、当時としては画期的なものであったといえる。

ところで、安井てつを招き、また女子留学生を日本へ派遣するなどした当時のタイの女子教育の目標、とりわけラーチニーの目指した女性像とはどのようなものであったのであろうか。この問題は、次に提示する重要な

問題点とも絡むので、詳しく検討していきたい。

### ３．良妻賢母言説への疑問

前節を承けて、ここで、避けて通れない疑問を提示したい。タイ側がラーチニーを通して、日本から良妻賢母主義教育を移入しようとしたという言説についての疑問である。たとえば、数少ない先行研究の一つであるブアワンポンや橋本論文は、ラーチニーを「日本の良妻賢母主義を範として創立された学校」（ブアワンポン：88）であり「単なる上流階級の子女の教養教育を超えた、まさに「良妻賢母」主義の教育を目指していた」（橋本：6）と規定している。タイ側が望んだのははたしていわれるように「良妻賢母主義」であったのだろうか。結論を先取りすれば、いずれも「誤解」であったと言わざるをえないのだが、こうした「誤解」の原因を考えてみると、それぞれが参考にしている先行論文（エッセイ）の「良妻賢母」という言葉の使用の問題に行き当たる。

少々くどくなるかもしれないが、具体的にブアワンポンから見てみよう。彼女はまた「皇后」（サオワパー王妃）が日本の「良妻賢母主義に関心を持ち日本の女子校を模範としシャムの女子校を創立し」た（ブアワンポン：89）とも述べているが、これは、彼女が参照した吉川敬子の論考に「皇后の望む女子教育とは、あくまでも、「良妻賢母」足りうる女性を育てることであった」（吉川：139）、「シャム国の望む「良妻賢母」型教育と、安井のキリスト教に（…）」（同：140）などと書いているのに影響を受けたためと思われる。しかしこの場合に吉川が用いている意味の良妻賢母は、「賢い、よき女性」程度の一般的な意味である。ブアワンポンはこれを明らかに明治日本の「良妻賢母主義」と混同して、自身の論を進めてしまったのである。また、ブアワンポン・橋本の両者ともが依拠している吉川利治の論考に、ラーマ５世が設立した前述のタイ最初の女学校スナンターライ校

に対して、「外国語は話せても良妻賢母型の婦人には育たず、評判が悪くて、廃校になってしまった」（石井・吉川：149）と記した個所がある。この場合もまた、「つつしみ深い、従順で家庭的な」といった意味合いで良妻賢母という言葉を用いてしまっているのだが、しかるに後続は狭義の「良妻賢母主義」教育、あるいはイデオロギーに置き換えたのである[12)]。こうした混同は、逆に現代日本での一般に使用される良妻賢母ということばの「蔓延」と曖昧さを図らずも滲みだす結果となっている。

さて日本側の資料では安井らは極めて大きな足跡を残したことになっているが、タイ側の論考と温度差があって興味深い。日本側の資料では、タイ語も必要以上に習得し、さまざまな障碍にもめげず努力した安井の功績を、その教育的足跡とともに感傷的に描き出そうとしているのが顕著なのに対して、タイ語の資料では安井らの教育は手芸を伝えた以外にさして何の影響も残さなかったと極めて冷静である。こうした齟齬の因となったのは、タイ側の見方では、言葉の問題とされている。即ち安井らがタイ語できず、といって生徒たちも英語で高度な会話ができるわけでもなく、コミュニケーションが難しい。当初の安井らの意図はどうあれ、満足にコミュニケーションもできないので、結局は言葉がそれほどの障害とはならない手芸科目が重点的に教えられるようになり、結果的にはタイ最初の本格的な女子教育を目指してラーチニーを開校した王妃の意に反することになったとされる[13)]。いずれにしても安井らの教育は到底サオワパー王妃の期待を満たすものではなく、契約延長はなかった（スランシー：23）。

ところで先にサオワパー王妃は日本に女子留学生を派遣したことに触れたが、ここで安井の後に教壇についた日本への4留学生のうちの一人カチョンの人生を振り返るのは有意義であろう。娘によるカチョン（1890-1986）の回想記（タッサニー：1987）を読めば、彼女はプローイの幼少時代と同じように宮中での教育を受けたクンラサトリーであり、日本

に行きまさに当時真正の「良妻賢母主義」の中心地であったお茶の水の空気を多分に吸って帰国した（1903-07）のであるが、その後ラーチニーに勤めたあと、のちにチュラーロンコーン大学文理学部長および総長となる人と結婚し、仕事を辞め、夫の赴任に従いイギリスなどにも渡った。回想記の中で、時代の変化に違和感を吐露する彼女の姿は、まさにプローイを彷彿させる。ラーチニーでの足跡は、安井らと同じく最新の手芸法を伝えたことにあり、日本の「教育理念」の移入という事では、ほとんど何の影響も与えなかったというのがまたしても一般的な見方である。

とはいえ、サオワパー王妃の理念が反れた原因を安井ら日本人教師の言葉（タイ語）の能力不足だけに帰すのはフェアーではなかろう。タイ人は一般に教育理念に興味なく、また当時の「父兄」や学校関係者の女子教育に対する期待が僅かなものでしかなかったことも起因しているであろう。たとえば、ラーチニーを担当している政府高官で安井をサポートすべき立場のルアン・アピラックが何の働きもせず、加えて彼の方針は「女性の学習すべきは、深く思考するような（ルー・ラック・ナックプラート）学科でなく、裁縫刺繍やよき妻となる学科」（ユパーポーン：70）だったこと。また安井は諸問題を当時政府の教育顧問であったダムロン親王に相談したとあるが（吉川：139）、ダムロンの教育方針は女性に男性と同じ教育の必要を認めず、その女性観とは、女性はあくまでも「国の彩り」であり「母、姑、そして妻の役割かつ、年長者の意見によく従う」としたものであり、また前述のスントンプーばりの処女性の強調も忘れてはいない（サーイチョン：265-288）。そしてラーチニーのおもに上流階級に属する父兄たちもそうした観を共有していたとおもわれる。管見ではダムロン親王はタイでの「創られた伝統」の考案者とでもいうべき「ダムロン史観」の主でもあるのだが、こうした「父兄」やダムロン親王や役人たちなどの男たちの期待は、サオワパーの意図に全く相反するものであったのだ。

ラーチニー校は、今でも刺繍や造花教育の高いレベルで有名であるが、安井や留学生たちを知る人は少ない。ある卒業生は、「安井の影響を感じる人は殆どいないだろう。何を教えたかもよく分からない。「良妻賢母」といった教育もとりわけ感じらない。それよりラーチニーは王族の方が多く関係している学校で、行儀作法はことのほか強調して教えられた。クンラサトリーという言葉がまさにしっくりとくる教育である」[14] と述べている。ラーチニーはタイ最初の本格的な女子教育を目指して開校されたものの[15]、軌道がそれてしまった。そして最初のずれは現在まで影響していると考えることもそれほど的外れとも言えないであろう。

## 結びにかえて

以上のように考えると、いままでの論者たちとは違って、サオワパー王妃が女性の教育の向上を望んだにもかかわらず、ダムロンたちの男性言説のまえに理念は屈した、とも考えることができるのではないだろうか。その証拠にダムロンたちの言説の源泉となっているとも思われるスントンプー的価値観（「女性訓」）が、その後のマス・メディアやタイの女子教育全体にも多大な影響を与え続けていることが、前述のスマーリー他によって指摘されている。サオワパー王妃やその後の 20 年代 30 年代の一部の上流婦人の知識人サークルや、さらには第 1 節で触れた「学生革命」期の女性言説までもが、強力な男性言説にとりこまれ、あるいは屈した結果、日本における「女大学」の如く、スントンプー的男性言説が実際のレベルでは大量に再生産されつづけていると言ってもあながち過言ではなかろう。

すでに第 1 節では、「四代記」におけるクンラサトリー（良家の婦人）としてのプローイの立場が顕著にみてとれたが、時代をほぼ同じくするラーチニーでの実際の女子教育でも、その目標となる女性像は、かの文学作品と軌を一にするものであったのである。この二つを結びつける接点は男性

言説に支えられた「クンラサトリー」としての女性像であったことは、既に言う必要はないであろう。さらには、すでに本稿の「はじめに」の個所でも述べたように、スントンプーやククリット的価値観は現在でも社会的に大いなる効力をもっているのだが、そうした状況とリンクするように、ラーチニーでは、現在でもクンラサトリーこそが目標の女性像とされているのである。

今後ともプローイは再生産され続け、21 世紀においても女子教育さらには女性の役割の幅を限定する頚木となるのであろうか。

**注**

1）　昔から、タイを訪問しマーケットの様子などを見た西洋人などによりタイの女性の地位が高かったという議論がされている。それと逆に主にタイの社会学者・仏教学者等によりタイ女性の伝統的「抑圧」も議論されている。この辺の事情は、短い論考ではあるが速水洋子のエッセイ（「タイ社会と女性」『タイを知るための 60 章』（明石書店）2003 所収）が最も的確にとらえているので一読されたい。

2）　タイ航空の労組が番組制作側に抗議したことなどで、日本でも報道された。（日本語ではその内容から「客室乗務員戦争」と訳された。）また抗議内容に、どうして日本の「グットラック」のような番組がタイでは作れないのかというような意見もあった。

3）　詳しくは、2007 年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書「東アジアの生活文化とジェンダー――比較文化論的アプローチ」（研究代表者：荻野美穂）を参照されたい。

4）　引用はドークヤー版『シー・ペンディン』2000 年の拙訳による。以下巻数及び頁数のみ記す。また日本語訳に吉川敬子訳『王朝四代記』第 1 巻－ 4 巻（勁草書房）1980-1981、がある。ただし用語などの面で日本の平安朝をイメージして訳している感があるので、かなり独特の風味のする訳となっている。

5）　スマーリーの指摘にもある通り、「love」がだんだんと結婚の理由になるのは、1920 年代ラーマ 6 世時代以降である（Sumalee：83）。

6）　森も日本語版『王朝四代記』の解説の中で、「当時のタイ国における男尊女卑の一般的傾向の中で、この”事件”が、タイ一般民衆に与えた驚きはほ

とんど、衝撃に近い」（森 1980：11）としているが、それに続けて「やがては女性の意識の向上へとつながっていくことになる」と即決しているのは少々拙速の感を否めない。

7） ただし訳者の吉川敬子も注で指摘しているとおり、時期的にはサオワパー学校（1896 年設立）に変わっている。

8） 第 2 節で扱う安井てつが学んだ時代のお茶の水もまた、そうした欧化主義の影響がいまだ色濃かった（青山：27）。安井はそうした風潮にはあまり馴染まなかったようである。

9） 学生運動女性闘士で詩人のチラナン・ピットプリチャーらによってプローイの女性像が批判された（Mattani：117）。

10）現在ククリットの部下たちが新聞をはじめとするほぼマス・メディアの中枢を占めているとの京都大学玉田芳史教授の御教示による。（バンコクでの玉田氏の講演「タイの政局はなぜ混迷を続けるのか？」（2008 年 6 月 3 日、The Bangkok Club, Sathorn City Tower）における筆者の質疑に対する応答及びその後の談話に基づく。）

11）「傲慢」なアンナの「偏見に満ちた」視線に基づいた「アンナと王様」はタイでは上映禁止である。ただし最近ではアンナの復権を求める読み直しの論調も（タイ国外では）ある。

12）ブアワンポンの場合は単に混同して使用している面がつよいが、橋本の場合は、持論へ組み込むために、恣意的に良妻賢母イデオロギーに置き換えて引用している（引用に際しても良妻賢母を鉤括弧付きの「良妻賢母」（橋本：5）に変えている）。

13）これに基づけば橋本が「安井により、最先端の女子教育が提供された」（橋本：14 註 6）と述べているのとは、実は全く逆であったことになる。

14）筆者による元チュラーロンコーン大学日本語講座準教授カンラヤニー・シータスワン先生へのインタヴューによる（2008 年 8 月 13 日、於：チュラーロンコーン大学）。またラーチニー校での担当者（現役教師）に対するインタヴューでもほぼ同様の回答をいただき、「生徒によるてつ先生（安井）の認識度は低く、また当校の教育の目指す女性像は、昔も今もクンラサトリーである」とのことであった（2008 年 9 月 2 日、於：ラーチニー校）。ところで良妻賢母をそのまま訳してタイ語にすると、「ミヤディー・メーチャラート」だが、筆者が複数のタイ人に聞き取りをした限りでは、そのような言葉はタイ人に特定の女性のイメージを喚起するものではなかった。「ミヤディー・メーディー」（良妻・良母）ならば、伝統的女性イメージであるクンラサトリーを想起する人が多かった。

15）「男性の後塵をはるかに拝していた」当時のタイの女性に「外国諸国における女性に匹敵する文明へと至る知識を得る機会を開く」というサオワパー王妃の理念に基づいて開設された（ローンリアン・ラーチニー 2004：35）。

**参考文献**


青山なを『安井てつと東京女子大学』青山なを著作集第三巻（慶應通信）1982

石井米雄・吉川利治『日・タイ交流 600 年史』（講談社）1987

ケーロン・パパーワシット（森幹男訳）「タイ教育史」『比較教育文化施設紀要』（九州大学）第 19 号第 6 集（1967）pp.140-172.

小関三平「明治の「生意気娘」たち（下）」『女性学評論』（神戸女学院大学）第 11 号（1997）pp.57-83.

橋本泰子「20 世紀初頭タイにおける男女規範をめぐるイデオロギーの再編成」『社会学研究科紀要』（四国学院大学）第 4 号（2004）pp.1-18.

韓 亨九（ハン・ヒョング）「「恋愛」に見る韓国文学の近代性と前近代性」比較文学比較文化フォーラム『近代文学と恋愛』（於：東京大学駒場キャンパス、2002 年 12 月 7 日）配布資料 pp.1-17.

ブアワンポン・チャリダー「明治期シャム国日本派遣女子留学生について」『法制史学』第 42 号（1990）pp.84-105.

牟田和恵「セクシュアリティの編成と近代国家」『セクシュアリティの社会学』岩波講座現代社会学第 10 巻（岩波書店）1996. pp.77-93.

村田翼夫「戦前における日・タイ間の人的交流」『国立教育研究所紀要』第 94 集（1978）pp.187-214.

森幹男「タイ国の民間女子教育と格言文学」『朝日アジアレビゥー』第 27 号（1976）pp.142-148.

森幹男「ククリット・プラモートの人間像と『王朝四代記の背景』」（吉川敬子訳）『王朝四代記』第 1 巻（勁草書房）1980. pp.4-17.

吉川敬子「安井哲とタイ皇后女学校」『朝日アジアレビゥー』第 27 号（1976）pp.136-141.

Mattani Mojdara Rutnin: *Modern Thai Literature*（Thamamasat Univ. Press）1988

Sumalee Bumroongsook: *Love and Marriage*（Chulalongkorn Univ. Press）1995

Watson, Keith: *Educational Development in Thailand*（Heinemann Asia）1980

タッサニー・ブンヤクップ ท่านผู้หญิงทัศนีย์ บุณยคุปต์「ラーマ 5 世期の日本「行き」」『シンラパワタナタム』ศิลปวัฒนธรรม 8:6（1987）pp.66-83.

ユパーポーン・チェンチェーンキット ยุพาภรณ์ แจ้งเจนกิจ『タイ女性の研究：ラー

チニー校のケーススタディ』การศึกษาของสตรีไทย:ศึกษากรณีพาะของโรงเรียนราชินี（พ.ศ.2447-2503）（タマサート大学修士論文）1987
ローンリアン・ラーチニー โรงเรียนราชินี『ラーチニー校 50 周年記念』ในงานฉลองครบรอบ ๕๐ ปี โรงเรียนราชินี（バンコク）1965
ローンリアン・ラーチニー โรงเรียนราชินี『ラーチニーの 100 年』ศตวรรษาราชินีสถาน（バンコク）2004
サーイチョン・サッタヤーヌラック สายชล สัตยานุรักษ์『ダムロン親王：シャム人の「タイ国」及び「階級」アイデンティティの創造』』สมเด็จฯ กรมพระยาดำรงราชานุภาพ การสร้างอัตลักษณ์ “เมืองไทย” และ “ชั้น” ของชาวสยาม（マティチョン）2003
サーイチョン・サッタヤーヌラック สายชล สัตยานุรักษ์『ककリットと「タイらしさ」の創造』第 1 巻 คึกฤทธิ์กับประดิษฐกรรม “ความเป็นไทย” เล่ม ๑（マティチョン）2007
スランシー・トンシアンソム สุรางค์ศรี ต้นเสียงสม「19 世紀タイ教育改革における日本の影響」『アシアパリタット』เอเชียปริทัศน์ 17:1（1990）pp.17-27.

＊ブアワンポン論文を除きタイ人の氏名は慣例に従い、名・性の順とした。また本稿では、タイ人名等をローマ字転写せず、便宜上カタカナ表記とした。

（大学院博士後期課程修了）

# SUMMARY


**Kukrit Pramoj's *Si Paendin* (*Four Reigns*) and "Kunlasatri": With Consideration of the Relation Between Modern Thai Female Education and Japan**

Hideki HIRAMATSU

The aim of this paper is to survey the dominant female image in male discourse in Thailand, with consideration of modern Thai female education, including the relation of Japanese women's education to Thailand during the Meiji Era (equivalent to Rama V era).

In this paper, firstly, I try to investigate the state of Thai women through the famous literary work *Si Paendin* (*Four Reigns*) by Kukrit Pramoj. And secondly, I will reconsider the state of female education in those days by focusing on Rachini School as a point of reference. And finally, I will raise a few questions challenging the point of view that regards the early education in Rachini school as fostering a "good wife and wise mother (*Ryosai-kenbo*)" ideology.

In the course of my argument, it should become clear that the ideal female image of "Kunlasatri," just like Ploy as depicted in Kukrit's *Four Reigns,* has long been a dominant figure in Thailand. Moreover, such an image has been reproduced again and again by the male discourse.

One of the most dominant traditional male discourses which emphasizes the female image of "Kunlasatri" is "*Instructions for women*" by the famous classic poet Sunthonphu, which has had a strong influence, not only on male intellectuals like Kukrit but also on female education in Thai society as a whole.

Besides, interestingly enough, as a result of the investigation, it should also be revealed that the educational target at Rachini school, was not to be a "good wife and wise mother" influenced by Meiji Japan, as it was defined by some scholars, but was and still now is to be "Kunlasatri," just like Ploy as seen in Kukrit's *Four Reigns*.

In this way, we can see the sense of values of the Sunthonphu school overwhelmingly informing the basis of Thai society, and influencing the

image of the ideal Thai woman today. What remains to be seen is whether Ploy will also keep being reproduced in the 21st century, to be the yoke which narrows the range of female education.

**keywords :** Kukrit Pramoj, *Si Paendin* (*Four Reigns*), Rachini School, Tetsu Yasui, "good wife and wise mother (Ryosai-kenbo)"